定価一部50円
第288号　昭和44年6月10日発行（毎月10日発行）

昭和44年（1969年）
6月号（No. 288）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

会員通信
エベレスト・1970年……三田幸夫… 1
ヒマラヤ登山新規則…… 2
国学院大の雪崩遭難……松永敏郎… 3
追悼・下岡忠一氏……藤島敏男… 3
アメリカ，カナダなどの山岳会…… 4
オーストリアの山岳会…… 5
図書紹介
一高旅行部五十年…… 6
ヒマラヤ登攀史…… 6
会務報告
四月定例理事評議員会…… 6
昭和43年度会員総会議事録 …… 6
四月臨時理事評議員会…… 7
支部長会議…… 8
エベレスト委員会日誌…… 8
ルーム日誌…… 8
会員異動…… 9
ルーム基金入金報告…… 9
既申込者の入金報告…… 9
新入会員……10
昭和43年度収支決算表 ……11
財産目録……11
昭和44年度収支予算表 ……11
図書室便り
新刊図書受入報告…… 8
定期刊行物受入報告…… 8
洋書受入報告…… 8
その他
退職ごあいさつ…… 9

エベレスト・一九七〇年

三田幸夫

一九七〇年の春、エベレストの南壁を登って、その頂きに立とう、というのが、懸案であったエベレスト登山計画の根幹となりました。

エベレストに関する経過についてはすでに会員各位には大方ご承知のことと存じますが、一九五六年、マナスル登山成功以来、最高峯であるエベレストの登山を実施すべく慎重に準備を進めて来ましたが、その間に一九五九年には、ヒマルチュリに登山隊を派遣し経験を積んでまいりました。この他にも本会会員の海外登山は活発で多くの登頂に成功しており、この十年の間に海外登山の経験者は非常に多くなってきました。

このような背景の中で、エベレストへの第一歩は、一九六三年、当時副会長であった私が、登山交渉のためネパールを訪問いたし、一九六六年プレの登山料の半額を支払い、内諾を得て来ました。しかしながらいざ準備開始という寸前、一九六五年五月、ご承知のネパール・ヒマラヤ登山禁止令によって一時中断の止むなきにいたりましたが、今度、その一部解禁と新規則書の発行によってここに新たに会の総力をあげて、この計画を完遂しようとするものであります。

エベレストはすでに一九五三年英国隊の初登頂を皮切りに、スイス、中共、米国、印度などによって登られていますが、本会は、これらの実績の上に立って、誰しも試みたことのないその南壁を登って頂きを目指すという意慾的なもので、ヒマラヤの自然条件の中では技術的にも体力的にも極めて困難なものが推察されます。

エベレスト、八八四八メートルの高さはすでに経験されたものでありますが、その持つ困難さは、今もなお厳然としてわれわれの前にあります。

今回の計画は、その高さの持つ困難さと、その中でのむづかしい岩登りを必要とする南壁ルートをとりあげた点が、ポイントになる次第であります。

これを成功させるために、サウスコルに強力なステーションを設け、支援と収容に努めます。これをシルバーステーションと呼びたいと思います。

ここには酸素室を設置して、隊員の休養、高所生理の研究ならびに高所気象観測などに当てるつもりです。当然のことながら、サポート隊はサウスコルから東南稜を経て登頂し、南壁パーティーとランデブーを行う予定であります。

本会は、過去の経験と実績を総動員し、あらゆるデーターを調査、研究し産業界を初め各界の協力を得て、強力な科学的なバックアップのもとで、この大高所での登攀を成功させたいと念願しております。このため全日本的なメンバーを編成し、最新の装備、器具食糧、酸素などの準備を進めております。

この計画の実施により、日ネの友好親善はもとより、わが国の関連産業界に寄与するところも大きいことと信じますと同時に、社会問題化している昨今の山岳遭難防止への一助として、より強く、正統的な登山の社会的にアピールすることを重視したいと思っています。

以上が概略の経過と趣旨でありますが、別項の通り、一九七〇年春にエベレスト登山本隊、一九六九年春に第一次偵察隊、秋に第二次偵察隊を派遣することになりました。

私は、会員各位のこの計画によせるご理解と温い、そして絶大なご支援をいただかない限り、つまり全会員が総立ちになって協力しなければ、本会としての目的達成はあり得ないと信じておりますので、あらゆる機会を通じてご報告をしたいと思いますので何とぞよろしくお願い申しあげる次第であります。

すでに、第一次偵察隊として、藤田佳宏隊長、植村直己、菅沢豊蔵両隊員、毎日新聞特派員相沢裕文（会員）の四君は、四月二十三日一・三トンの荷物と共に羽田を発ち、ただいま（五月八日現在）ナムチェバザールからベースキャンプに向ってキャラバンを続けております。

〔**計画概要**〕

一、目的

南壁からの登頂、ならびにサウスコルを基地とする東南稜からの登頂、およびこれに伴う科学的調査研究。

二、期間

本隊、一九七〇年プレモンスーン。第一次偵察隊、一九六九年プレ。第二次偵察隊、一九六九年ポスト。

三、内容

㈠登山

①南壁の登攀

クウム氷河の約六五〇〇メートルから、南壁一五〇〇メートルをロッククライミングする。これを支援ならびに収容するために、サウスコルに酸素室を持つ強力なステーション（シルバーステーション）を建設する。

②東南稜からの登頂

㈡科学

①高所生理

人体の高度順化の限度に関する研究。

シルバーステーションを中心とし、八〇〇〇メートルの高所における長期間滞在する隊員などを重点におく。

酸素発生器の開発など。

②気象、地球物理

ヒマラヤの高所気象のデーター蒐集、気象衛星ＥＳＳＡ六号の受信データーによる観測、日本の気象におよぼす影響など。

③雪崩

ヒマラヤでの遭難事故の殆んどは雪崩によるものであるので、これらの科学的、物理的なものと、観察を含めた調査研究を行なう。

お知らせ

本会婦人懇談会では九月に立山千寿カ原文部省登山研修所で女性登山講習会を開きますが、その資金を集めるため七月十七日（木）午後六時半から本会ルームでビール・パーティーを開催します。

参加費は一人五百円。（ビールジョッキ二杯とつまみ付き）追加ジョッキは一杯二百円。多数会員の参加を希望いたします。

ヒマラヤの雪崩—氷河雪崩、地形との関係、分類、雪質、雪温、積雪、氷と雪の問題など。

㈢記録、報道

①公式記録映画作成(16ミリ、カラー)

②新聞報道（毎日新聞社、内定）

③TV放送

四、隊の編成

㈠日本人隊員　三十七名

隊長：松方三郎（前会長）

登攀隊長一名　登攀隊員、十五名、マネジャー一名、科学班、三名、隊付医師、一名、報道関係、一五名。

㈡現地人（ベースキャンプ以上）五十五名

サーダー一名、クック一名、シェルパ三十三名、ローカル・シェルパ二十名

五、予算

総経費、一億円

本隊、七千万円、偵察隊（第一次、第二次）三千万円。内訳明細については後日掲載。

☆現在後援として、文部省の国庫予算、毎日新聞社（内定）、TV局（交渉中）など折衝中で大方をこれでまかなう予算編成になっております。また会の募金は最低一千万円を目標にしております。

ヒマラヤ登山遠征隊規制に関する規則

一九六九年

行政手続規制法一九五七年の第二章により付与された権限を行使してネパール王国政府は次の規則を制定した。

一、規則の名称ならびに発効の時期

①この規則の名称は Rules Governing Mountaineering Expedition, 1969 とする。

②この規則は直ちに発効する。

二、遠征隊の申請手続

①別表2に指定されたヒマラヤのピークに遠征を実施するためには、別表に規定されている申請書の様式に従い所定の事項を記載したのち、当該遠征隊の所属する国を代表する登山団体またはその他の科学団体の推薦状および所属国政府の許可書と共に、ネパール政府外務省に、申請書を提出しなければならない。

②ネパール政府は、前項により申請されたアプリケーションを受理した場合申請された山への遠征実施のための許可書を発行する。

三、登山料

①登山料は、前項により許可された遠征隊から次のレートで徴収される

(a)　エベレスト　一万ルピー

(b)　エベレスト以外の二六、〇〇〇フィート以上の山（八千メートル峰）　八千ルピー

(c)　二六、〇〇〇フィート以下の山　六千ルピー

②前項①により規定された登山料の半額は公式許可書の取得時に支払わねばならない。残額は遠征隊の出発までに支払えばよい。

③前項①により規定された登山料はドル、ポンドまたは遠征隊自国の通貨（ただし、この場合はネパール政府が受理できる通貨に限る）で支払わねばならない。

④前項②による登山料の前払金は登山隊が隊の都合によりその計画を中止した場合は、返却されない。

四、リエゾン・オフイサーとポーター

①登山隊は遠征期間中ネパール政府によって任命されたネパール人のリエゾン・オフイサー一人を隊に同行しなければならない。

②上記リエゾン・オフイサーには、遠征隊は食糧、旅費、ポーター賃ならびに心要な装備を支給するほか、遠征隊出発から帰着までの期間、月額八百ルピーを支給せねばならない。

③ネパール政府は在カトマンズのヒマラヤン・ソサイテイを通じて、登山隊が要求する数のサーダー、シェルパ、ポーターを斡旋する。

④遠征隊は、ベース・キャンプ以上で使用するために雇傭するサーダー、シェルパ、ポーターに対しては、遠征隊の隊員に支給する装備と同等の装備を支給しなければならない。

五、補償金

①遠征隊のコース途上で発生した事故により、同行したリエゾン・オフイサー、サーダー、シェルパ、ポーターに負傷者が出た場合には、登山隊は負傷の程度により、ネパール政府により算定された額の補償金を支払わねばならない。

②遠征隊は上記①による死亡事故の場合には、遺族に対し、次の基準により補償金を支払わねばならない。

i リエゾン・オフイサーの死亡　五万ルピー

ii サーダー、シェルパ、ポーターの死亡　三万ルピー

③遠征隊は前項②で示されている金額の傷害保険をかけることにしてもよい

六、コピーの提出義務

遠征隊は、遠征期間中に蒐集した資料の標本、すべての種類の刊行物、写真各二部を遠征が終了し、遠征隊がネパールを離れる前にネパール政府に対し提供しなければならない。

七、遠征隊に対する禁止事項

①遠征隊は、ネパール政府により指定されたルート以外での行動ならびに許可された山以外への登山行動を行ってはならない。

②遠征隊は特別のライセンスまたは現行法規にもとずきネパール政府の許可を得ている場合を除き、いかなる武器弾薬、その他の危険物をも遠征に携行してはならない。

③遠征隊は現地住民の宗教的、社会的もしくは道徳的慣行および風習に反するような行動を、みだりに行ってはならない。

④遠征隊はネパール王国の安全をおびやかすような写真や住民の宗教的、道徳的な感情を傷つけるような写真を撮ってはならない。

⑤遠征隊はネパール政府より許可を得ている場合、もしくはリエゾン・オフイサーの監督のもとにある場合を除き、いかなる場合またはキャンプでも、いかなる種類の無線機をも使用することはできない。

八、遠征ニュースの公表ならびに放送

①遠征隊は、遠征の成功、失敗、事故などに関するすべてのニュースを、これらのニュースの送信に先立ち、ネパール政府に第一報を送らねばならない

②ただし、特別記事（読みもの）や個人的寄稿のような特別のニュースは、もしその内容がネパール王国の名誉を傷つけるようなものでなければ、自由に出版し、放送することができる。

九、登山用物資の処分

①遠征隊は遠征終了後登山用物資をネパール国内で処分（売却などによる）することができる。

②上記処分を行なおうとする場合には、優先権をネパール政府国防省と登山学校に与えねばならない。

十、ネパール人との合同登山隊に対する特典

登山隊のメンバーとしてネパール人を含む、合同遠征の性格をもつ遠征隊には、ネパール政府による許可決定の際特典が与えられる。

十一、規則を遵守しなかった場合

遠征隊、隊のメンバー、隊のスポンサーなどが本規則を遵守せず本規則に違反した場合には、ネパールへの事後の登山遠征を行なう資格が与えられなくなる。

その他重要な情報

一、遠征実施の期間は次の三つに区分される。

遠征隊は申請に際し、これらの中の一つを明記することが要求される。

①プレ・モンスーン（一月～四月）

②モンスーン（五月～八月）

③ポスト・モンスーン（九月～十二月）

二、アプリケーションに記入される山名は、別表に明記されている山の中の一つであることを要す。

三、登山やヒマラヤ地域での科学調査のために、ネパールへ入る外国の遠征隊は、必要物資の明細書を次の二つに分けてそれぞれ提出すること。

①ネパール国内で消費されるもの

②再び国外へ搬出されるもの

通関料は上記の物資に対してのみ徴収される。ただしネパール政府の手荷物規程に該当する私物（個人的所有物）には税金はかけられない。

②に該当する物資に対する通関料は一応税関当局に供託されるが、再搬出される物資に対する供託金は、ネパールを離れる際に遠征隊に払い戻される

ただし②に属する申告荷物の中で持ち帰れなかったものがある場合にはそれに相当する供託金から控除される。

煙草、酒を除く遠征隊用物資の関税率は十パーセントを越えることはない

供託金は現金または小切手で行なうことを要する。

四、ネパール国内で必要とするネパール通貨は、ネパール中央銀行を通じ交換しなければならない。

お願い　前月お知らせしたように会費が値上げになりましたが、なるべく早目に会費をお納め下さい。

国学院大学山岳部のなだれ遭難

松永敏郎

去る三月十七日、硫黄尾根にて発生したなだれによる当山岳部の遭難事故に際しましては、各方面に非常な御迷惑をおかけ致し、また、それにもかかわらず、会員の多くの方々より種々適切な御教示をいただきましたこと、お詫び申し上げるとともに、厚くお礼申し上げます。

四月十二日を最後に、埋没した五名全員を発見して遺族の手に渡すことができましたので、事故についての一応の解明と経過を簡単ながら御報告申し上げ、御叱声をいただきたく存じます。

今回の計画は、部の春山合宿として、湯俣から硫黄尾根に入り、小次郎のコルにB・Cをおいて槍ヵ岳を往復した後、参加メンバーの内四名が樅沢岳を経て笠ケ岳まで縦走するという、約二十五日間の日程で三月七日東京を出発致しました。

計画表によれば、三月十五日には十一名全員がB・Cに集結する予定でしたが、参加者中一名が体をこわして下山、後発の二名が関東地方の大雪で出発が遅れて到着しておらず、小次郎のコルにおりましたのは八名でありました。入山以来、十二日と十四日にそれぞれ約五十センチメートルの降雪があり、また、B・Cを設営した後の十六日午後から風雪が続き、行動を中止しております。

十七日、事故発生当日は五時に朝食を終えましたが風雪が続いておりましたため、一応様子を見るということで待機していたところ、十時前降雪も止み青空がのぞけるようになったので、ルート工作の二名が先行し、三十分後に六名が、赤岳に続く岩峰のルート工作に必要な用具をもって出発しました。当日朝のリーダーの手帳には「なだれを考えるとうかつに行動できない」と記してありましたが、実際には、雪が止むと同時に出発しております。それまでの日程の後れにいらいらしており、天候回復にさそわれて、せめてルート工作だけでもという気持にはやり、手帳に記したそれとは裏腹に、新積雪の危険性に対する配慮は、実行動の面ではまったく怠ったと思われます。

なだれは、面発生（乾燥）新雪表層なだれと推定致しました。硫黄岳南峰からほぼ三百メートル南に当たる小次郎沢谷頭を起点に、主稜上約百五十メートルを一辺とし、約七十度扇状に展開して、沢の右岸を形成する側稜上約百メートルに及ぶ、三角形の谷最上部の比較的緩斜面全体がなだれ落ちたことが、事故発生後に撮った写真で推定できました。

B・Cに当たる小次郎のコルからの雪稜の雪が深く、工作に先発した二名に他の六名が追いつき、十二時四十分より三十分ばかりの昼食を摂った後、岳樺、つがの疎林のある稜線上を全員が同一行動しておりますが、ラッセルは腰上あたりまであり、スキーストックを使って表面を切ると「その部分から新雪層、深さ約五十センチが板状になって崩れ落ちていったので、これを叩き落としてからルートをつけていった」ということで、この部分で既に非常な危険を雪面全体がはらんでいたと思われ、事実「なだれが起こりそうだ」と感じたのでありますが、行動を中止することは全く考えておりません。

傾斜はその後比較的ゆるくなり、新雪層のおちることもなくなったので、先頭を交替しながら発生地点に到り、谷頭の、硫黄岳に通ずる稜線の小ピークに先頭がわずかに三メートルという所で、突然、「バスッ」という腹へ響く音がして、斜面全体に複雑な亀裂が入り、足下が遥れて動き始めたということであり、時刻は十四時三十分頃と思われます。

先頭にいて、数十メートルを流され幸いに脱出できた二名の話によれば、斜面の積雪は、十二日から十四日にかけて形成された約六十センチの層も同時に崩れおちて、約四百五十メートル下の小次郎沢屈曲点に至るルンゼ部分には、直後全くデブリが見られず、テラテラに氷化した雪面が顕われていたということですので、滑り面がこれに当たると思われ、分類上の（乾燥）は私の恣意的な判断であります。気温は入山当初よりすべて氷点下が続き、平均零下五度程度であります。（ただし、ゾンディーレンの折、当時のデブリ中に氷化したブロックが相当量感じられました。）

事故発生時、全員が雪稜上を一列に、ほとんど相互の間隔をおかずに行動しており、雪面への刺戟という点からみて、これもまた非常識な行動だと思われます。

主稜上のなだれ発生面は、ほとんどの部分にわたって彼等の踏跡に沿っていることが写真によって推定できました。

少くとも、上級生部員に関しては、研究会への参加や指導によって、新雪表層なだれについての一応の知識を持っていたと信じますが、これを、実際の判断力として行動に移していく知恵、なだれに関して本当に必要な能力を欠いていたために惹起されたものとして、関係者一同深く反省している次第です。

小次郎沢は谷頭から東面した比較的狭く傾斜の急なルンゼを形成して屈曲点に至り、南方向に著しく折れまがって、約九百メートルの緩傾斜の直線的な沢筋で千丈沢に出合う、すなおな感じを持つ沢でありますが、なだれは屈曲点から下全域に及んでデブリを残しておりました。

現地捜索は沢筋の危険性も考慮して十数名の関係者のみで行い、一名の自然露出の他、四名をゾンディーレンで発見収容することができました。

結果的にみれば、今回の場合は、約七百五十メートルを流されて脱出した一名の停止位置が確認でき、毛編手袋の片方をデブリ表面に発見できたことが、位置の推定に非常にさいわいし、発生地点から約八百メートルの間に比較的短時日で発見することができました。また、生存者をも含めて全員が行動中の順序通りに発見されたことで、デブリ末端部が埋没者の停止位置でなければ、体重や着衣が要因で内部での流動はほとんど起らないという一例になると思われます。

事故発生三日後から二日間に雨と雪が降り続いたため、当時のデブリ上部に両岸部からのなだれが重なり、固く氷塊化したデブリの層を取り除くことが捜索作業中最もつらかったのに、なだれ捜索の時期という点で考えさせられるものがあったことも付記させていただきます。

追悼

下岡忠一氏（元会員昭和五年二月入会一一五四番）四四年四月五日歿七十一歳。彼は府立一中時代から山仲間渡正監君（五一五番昭和二十八年歿）と山登りを始めていた。その上、創立発起人のひとり、梅沢親光先輩の直弟子で神伝流水泳の達人だったから、一高へきてからも水陸両棲で中々いそがしかった。渡君が旅行部、下岡君は水泳部の委員をつとめたのだが、山の方も大いに稼いでいる。

大正五年の夏は奥秩父の縦走をすませると、その足で甲斐駒仙丈に登り、さらに燕常念槍へと足を伸ばしている。いまならば、なんでもないが当時ひと夏にこんなに懲ばって、山を歩く学生はすくなかった。翌六年は南アルプス縦走、一行十名、十余名の人夫を伴って、西山温泉から入って二週間を費したという。日本の山々がまだそこなわれない美しい姿をもっていた頃に、それらの山々に登った幸福者のひとりということが出来るだろう。

大学生になってからも渡君と出かけていたにちがいない。私もこの両君と大正七年六月奥秩父、八年十月草津白根、岩菅山へ登ったことがある。ほかの登山者など出合ったおぼえがない。山は静かだったのである。

大正十年学校を出ると下岡君も私も同じ勤め先きへ、やとわれの身となった。月給取になっても山登りはつづけようと、その年七月にはふたりで鼻曲山、木曾駒に出かけ、十月には那須連山に登った（この時は武田博士、松本善二、黒田正夫の諸氏同行）。それ以来ついに山あるきをともにする機会はなかった。

中年以降、リュックサックをかついでというような山登りからは遠ざかっていたが、山への関心は失わず、昨年末届いた「一高旅行部五十年」には「最近レジャー・ブームの波に乗り、あまり歩かずに、いろいろな山に登れたり、昔不便だった所へ行けるようになりました。あまり俗化しないうちに、ぼつぼつ方々を廻ってみたいなど思っております」と書いている。

ふるい思い出を語り合う友人を、またひとり失って、私は寂寥を感じる。

因に昭和五年会報十五号に下岡君のクライネシャイデックとインスブルックからの短信がある。（藤島敏男）

☆アメリカ、カナダ、メキシコ☆
☆およびグワテマラの山岳会☆
シカゴ・マウンテニアズ・クラブ調べ

アメリカ山岳会のシエラ・ネバダ支部長、アレン・P・ステックに、アメリカ全体の山岳会の一覧表があったら送ってくれと頼んだら、それと一緒に次のような面白い手紙が来た。

〝お求めの表を、「シカゴ・マウンテニアズ」のフランシス・マレン博士から頂いたので同封しました。彼女は日本山岳会の幹事諸氏に宜敷くと言っていますが、その言葉通りにお伝えしましょう。

「皆様の御親切により、私の息子は日本山岳会の書記の方と結婚いたしました。それで彼女はわれわれを春の北アルプスへ案内してくれました」。

ステックはレオ・レ・ボンとバリー・ビショップと共に、「マウンテン・トラベル（USA）」という旅行斡旋業をやっているらしい。今年度のその事業計画も送って来たが長いのでやめておく。尚、カトマンズーにいる例のロバーツもこれの片棒を担いでいるようである。

（吉沢）

◇　◇　◇

(一) アメリカ

アラスカ州
アラスカ山岳会
アラスカ登山会

アリゾナ州
アリゾナ州評議会
カチナ山岳会
南アリゾナ・ハイキング・クラブ
アリゾナ大学山岳会

カリフォルニア州
アメリカ・ユース・ホステルズ
（これはアメリカ中に支部あり）
カリフォルニア山岳会
デゾマウント・クラブ
西部野外クラブ連盟
（六州に四一支部あり）
山岳救助協会（全国的組織）
ランブラーズ（法人組織）
サン・アントニオ・クラブ

シエラ・クラブ
（一八九二年創立、一八支部、会員三二、一〇〇人）

コネティカット州
大学旅行会（College Cuting Olubs）（エール大学その他六校）
エール大学山岳会

コロンビア特別行政区
アパラチア・トレイル協議会
ポトマク・アパラチア・小道会
荒野協会

ハワイ州
ハワイ小道および山の会

アイダホ州
アイダホ山岳会

イリノイ州
シカゴ山岳会
登るイリニ（イリノイ大学）
シカゴ大学旅行会
シカゴ大学山岳会

インディアナ州
パーデュ旅行会

アイオワ州
アイオワ登山者会

メーン州
メーン山岳会
メーン・アパラチア小道会
大学旅行会
（ベイツ大学他三大学）

メリーランド州
メリーランド山岳会

マサチューセツ州

アパラチア山岳会
（一八七六年創立、入支部、会員一〇、〇〇〇人）
AYH大ボストン評議会
大学間旅行会OB協会
ニュー・イングランド小道協議会
サブ・シグ旅行会
大学旅行会
（ハーデード大学他一三あり）

ミシガン州
AYHデトロイト評議会
ミシガン州旅行会

ミネソタ州
ミネソタ大学漂泊者クラブ

ミズリー州
AYH・セントルイス評議会

モンタナ州
ロッキー登山者クラブ

ニュー・ハンプシャー州
ダートマス山岳会
ダートマス旅行会
エクセター山岳会
ランドルフ山岳会
N・H大学旅行会

ニュー・ジャージー州
ドリュー大学他二校の旅行会
聖ピーターズ大学アルピニアズ

ニュー・メキシコ州
ロス・アラモス・マウンテニアズ
N・M山岳会
N・M大学山岳会

ニューヨーク州
アディロンダク山岳会（法人組織）

アメリカ山岳会
（創立一九〇二年、六支部、会員数八〇六人）
アメリカ在住スイス山岳会員協会
AYH
カナダ山岳会東部アメリカ支部
探険者クラブ
フインガーレーク小道協議会
大学間旅行クラブ協会
首都大学間旅行クラブ協会
山岳救助協会
ブルックリン大学広道会
ラマポ・ランブラーズ
大学旅行会
（ハミルトン大学他二〇校）

ノース・カロライナ州
デューク旅行会
N・C州小道会

オハイオ州
クリーブランド・マウンテニアズ

オレゴン州
アルピニーズ（法人組織）
アンゴラス
チェメキタンス
フド河クラブ・ラッツ

マザマス
（一八九四年創立、会員数一四八九人）
フッド山スキー・パトロール
オブシディアンス（法人組織）
州立大学山岳会
サンティアム山岳会（法人組織）
オレゴン小道会
カナダ山岳会西部アメリカ支部

ペンシルベニア州
ピッツバーグ・クライマーズ
大学旅行会
（アリゲニー大学他一五校）

ロード・アイランド州
ブラウン・ペンブローク旅行会

テネシー州
スモーキー山ハイキング・クラブ

ユター州
アルペンボック登攀会
ユタ大学山岳会
ワサッチ山岳会
ランブラー

バーモント州
グリーン山岳会
（創立一九一〇年、九支部、会員数一三〇〇人）
大学旅行会
（バーモント大学他二校）

バージニア州
メリー・ワシントン旅行会
ラドフォード大学生物学クラブ
リチモンド大学間旅行会
スウィート・ブライア旅行会
バージニア大学旅行会

ワシントン州
アルパイン・ローマーズ
ボーイング従業者山岳会
カスケディアンス
ディザート・ラッツ
西部旅行会連盟
ホブネイラーズ（法人組織）
インター・マウンテン山岳会
クラヘーン・クラブ
ベーカー山クラブ
聖ヘレンズ・クラブ
山岳救助連盟
（国内山岳救助団体二四への協力組織）

マウンテニアズ
（創立一九〇六年、会員数四八五二人）
北カスケード自然保護評議会
オリンピアンズ（法人組織）
オリンピク公園協会
タルミガンス
リムロック、マウンテニアズ
ザ・シェルパス
スカギト山岳会
スカギト山岳救助団（法人組織）
スポケーン・マウンテニアズ
マウンテニアズ・タコマ支部
ワンダラーズ
ワシントン山岳会

ウエスト・バージニア州
W・V・ウェスレヤン大学旅行会

ウィスコンシン州
マールケット・アベランシェ会
ウィスコンシン大学山岳会

ワイオミング州
ワイオミング大学旅行会

(三) カナダ

カナダ山岳会
(創立一九〇六年、国内八支部、会員数二二九一人)
B・C山岳会
ブルース小道協会
カルガリー山岳会
カナダ・ユース・ホステル協会
トロント山岳会
(Le Club de Montagne Canadien)
コモクス地方山岳会
マクギル大学旅行会
ロッキー山ランブラーズ
カナディアン・ロッキーズ・接空線
小道ハイカーズ
カナディアン・ロッキーズ小道会
B・C大学トレック旅行会
B・C大学野外クラブ

(四) メキシコ

メヒコ探検クラブ
(一二支部あり)
メヒコ・スポーツ連盟
(UIAAの会員)

(四) グワテマラ

グワテマラ山岳連盟
(UIAAの会員)

小集会お知らせ 第二五一回小集会は六月二十六日(木)午後六時半から本会ルームで村山雅美氏の「南極ソリ旅行の話」を行ないます。スライドを上映する予定です。

☆ オーストリアの山岳会について ☆ II

吉沢一郎

前号でエーリッヒ・ベニスの意題についての解答を御紹介したが、ここではオーストリア山岳連盟(Verband alpiner Vereine Österreichs)から出ている「交通案内」(Verkehrsbuch-Winterausgabe 1968/69)によって、その詳細を述べてみようと思う。

(なおオーストリアの国土は八四〇〇〇Km²——北海道と茨城県を加えたくらい——人口は七二五万、日本は大体一億とする。)

オーストリアにある山岳団体の総元締(というより連絡中心事務局という方がいいかも知れない)は前出の「オーストリア山岳連盟(VAVÖ)」である。これに直接加盟しているのが次の一一団体、即ち、

一、ドナウラント山岳会
二、オーストリア登山者協会
(これは三三の会が所属)
三、オーストリア山岳会(ÖAK)
四、オーストリア山岳協会(ÖAV)
(一六六の支部がある)
五、オーストリア旅行者クラブ
(四〇の支部)
六、自然の友・旅行者協会
(四〇〇団体)
七、Haller 山岳協会(Alpine Gesellschaft)
八、Krummholz 山岳協会
九、Preintaler 山岳協会
一〇、Peilsteiner 山岳協会
一一、Reisstaler 山岳協会

これら夫々の協会の本部は、ウィーン、グラーツ、ブレゲンツ、インスブルック、リンツ、クラーゲンフルト、サアツブルグそれにツェル・アム・ゼーなどにある。

この他に「オーストリア・ヒマラヤ協会」(Österreichische Himalaya-Gesellschaft, Wien)と「南チロール山岳会」(Alpenverein Südtirol)というのが別に存在しているが、後者はイタリー側のボーツェンにあり、二五の支部を持っている。又、ボーツェンには、「山岳救助協会」(Bergrettengsdienst)というのがある。

(二)の三一団体を一々列挙するのも余り意味がないと思うのでここではそれをやめるが、われわれに最も親しい(四)のÖAVの一六六支部のうち一〇〇〇人前後の会員をもっているところを示すと次のようになる。

Akademische Sektion Graz	1019
〃 Innsbruck	2264
Edelweiss (Wien)	14758
Gmunden	1101
Graz-Steirischer Gebirgsverein	11233
Innsbruck	11252
Klagenfurt	2160
Kufstein	3054
Leoben	1165
Linz	10135
Mödling	1122
Österreichischen Gebirgsverein	13299
Salzburg	4765
Schladming	900
Solbad Hall i Tirol	1028
Steyer	1512
Touristenklub Linz	1855
Villach	1305
Vöcklabruck	1005
Vorarlberg	4843
Wels	1957
Wien	1631
Wiener Lehrer	1971
England (Austrian Alpine Club)	3277
Holland	8522

以上ÖAVだけで正会員一六万、若年会員二万七〇〇〇人がいるので、大体二〇万と覚えておけばよい。

『ドイツ山岳会の現況』

前項に引続いて、序でであるから、Deutscher Alpenverein (DAV)についても少し紹介しておこう。資料は去年ミュンヒェンでG・ハウザーからもらった "Taschenbuch-Der Alpenvereins Mitglieder", Auflage 1968/69 であるから最新のものである。前のオーストリアの部でも、これから引用した部分がある。

西ドイツは面積二四万八〇〇〇Km²、人口五七一一万、つまり人口は日本の半分、面積は七割。

西ドイツには山岳会は一つしかないが、支部は三二一、正会員数は、合計が出てなかったので算盤でいれてみたら二〇五八四七と出た。若年会員を三五〇〇〇とすると大体二四万となる。従って概数ではドイツが二五万と覚えておけば当分の間には合う。

前例にならい一〇〇〇人前後の支部を列挙すると次のようになるが、この中にはドイツの海外遠征隊でわれわれに親しい名前がいくつも出てくる。

Allgäu-Immenstadt	2252
Allgäu-Kempten	1879
Ausburg	4595
Bamberg	1104
Berchtesgaden	1377
Bergbund (München)	1225
Berlin	3533
Bielefeld	1899
Braunschweig	1629
Bremen	2102
Düsseldorf	1325
Duisburg	996
Elberfeld	1239
Essen	1561
Frankfurt/Main	2981
Freiburg/Breisgau	1420
Friedrichshafen	1372
Garmisch-Partenkirchen	1868
Göttingen	957
Hamburg	3992
Hannover	2878
Heilbronn/Neckar	1633
Hohenstaufen (Göppingen)	1124
Karlsruhe	1502
Kassel	985
Konstanz	1279
Landshut	1157
Lindau/Bodensee	1102
Mannheim	1322
Memmingen	1142
Mittelfranken (Nürnberg)	1215
München	17798
Neu-Ulm	1470
Niederelbe (Hamburg)	3902
Noris (Nürnberg)	1843
Nürnberg	4102
Oberland (München)	10387
Passau	1195
Ravensburg	1197
Regensburg	1371
Reichenhall	924
Reutlingen	1330
Rheinland-Köln	2117
Rosenheim/Obb	1005
Schwaben/Stuttgart	8286
Stuttgart	2724
Traunstein	1035
Tübingen	2342
Turner-Alpenkränzchen (München)	949
Tutzing/Obb	970
Ulm	2092
Wiesbaden	1011
Würzburg	1363

図書紹介

一高旅行部五十年

一高旅行部縦の会編

旧制第一高等学校の旅行部は、大正二年六月に正式発足しているが、それ以前、明治四十四年、大木操、守島伍郎氏などの時代から山登りをやっていた、といった古い歴史を持つ部が昭和二十三年三月、学制改革によって東大教養学部となり姿を消すまでの四十年に近い部の足跡を、それぞれの時代の人たちがたん念につづってまとめたのが本書である。

大正から昭和の初期にかけての目ぼしい記録は、当時の「山岳」にかなり発表されているが、いずれも一高旅行部としてではなく、個人の名前で書かれており、また一高旅行部としての部報のようなものは、大正の末期と昭和の初期に二冊だけガリ版ずりの薄い記録集が出ただけであった。学校山岳部として、これはまことに珍しいことであったが、とにかくそうした理由で一高旅行部がどんな山登りをやっていたかということは、余ほど部と関係の深い人でない限り、ほとんど外部には知られていなかったのである。

今回これらの部の登山がひとまとめに発表されたことは、関係者にはむろんのことだろうが、部外者にとってもまことに興味深いものがあると思う。「一高山岳会発足の由来」(大木操)を筆頭に、日高信六郎、伴野清、黒田正夫、大島永明、藤島敏男、沢本三郎、入沢文明、深田久弥、小林太刀夫、木下是雄の諸氏ら全部で延四十五人のメンバーが古きよき時代の、あるいは戦中、戦後の苦しかった登山の思い出を語っている。筆者が会報二八三号で紹介した一高校友会雑誌二五九号にある大正五年秩父破不山遭難の記事も全文おさめられており、大正十三年三月の巻機山初登頂の記録を稲積豊二氏が書いている。

また石原厳氏によって大正十四年春の後立山爺岳、大正十五年三月鹿島槍の、ともに積雪期初登頂の記録がここに初めてくわしく眼にし得るのは、まことに有意義なことと考える。ここに日本の登山史上の空白が一つうめられたからである。

第二部の随想欄では、木村正彦氏が一九二八年から三〇年までチューリッヒに滞在中行なったモンテローザ、マッターホルン、ユングフラウ、メンヒ、フインシュテラールホルンなどの登攀紀行が注目される。

欲をいえば、写真が二枚きりないこと、タイプオフセット印刷なので何となく内容に比して全体の見ばえがしないことである。これだけのメンバーの顔ぶれからすれば何とかもっとスマートなものが出来たろうにと惜しまれる。とまれ歴史の古さをじっくり感じさせる読みごたえのある一冊である。

(山崎安治)

昭和四十三年十二月、一高旅行部縦の会発行、二百四十五ページ、五百部限定。希望者は東京都世田ケ谷区新町一ノ十七ノ九岡本信一郎方に申し込めばよい。頒価千円。送料別

ヒマラヤ登攀史(第二版)

深田久弥著

第二版とはなっているが、初版に筆を加えた、というより、全く新しく内容が書きなおされている。初版の発行されたのが昭和三十二年で、それから十数年たった。この間におけるヒマラヤの登山は、いわゆるエベレスト登頂に続く黄金時代で年々すばらしい記録が次ぎ次ぎに書き加えられていった。この新しい記録を総合してまとめられたのが本書である。初版において、序章「なぜヒマラヤに登るか」は第二版において「ヒマラヤへの遥かな道」となっており、初版の結び「ヒマラヤ未来記」が「日本人のヒマラヤ登山」と書きあらためられた。

登場する山は、アンナプルナ、エベレスト、ナンガパルバット、K_2、マカルー、カンチェンジュンガ、マナスル、ローツェ、ガッシャーブルムII、ブロード・ピーク、ダウラギリ、ゴサインタンと八千メートル峰すべてにわたっているのは同じだが、初版以後の新しい知識を加えてあり、たとえばマナスルの登頂にしても初版では簡単にふれてあっただけの一番肝心な第三次登山隊についてくわしく記されてある。

ネパール・ヒマラヤの登山は一九六五年種々な理由からネパール政府によって禁止されていた。その間の三年余り、ヒマラヤの記録を整理するという意味では、ちょうどよい時期であったといえる。そして著者はその期待にこたえてくれた。初版もむろんそうであったが、この版もたんなるヒマラヤ八千メートル峰の登山の記録集ではなく、著者の筆の力によって充実した肉付けがされているのが特色であり、そして単なる二版ではなく、新版であることを強調しておきたい。挿入されているヒマラヤの写真はすべて日本人の手になったもので、初版のスケッチよりはるかに迫力に富んでいる。

(山崎安治)

昭和四十四年一月岩波書店発行、新書版、二百十五ページ、写真、付図多数、定価百五十円。

会務報告

四月定例理事評議員会

(十日午後七時本会ルーム)

▽出席者　三田会長、深田、吉沢副会長、藤井、山崎、丹部、大塚、飯野、竹田、広谷、川森、長尾、芳野、小倉、浜野、野上各理事、堀田監事、沼倉、渡辺評議員、槇名誉会員

▽議事および報告

①エベレスト登山の件　(大塚)

ネパール政府より登山許可の内示があり、エベレスト登山を本会でいよいよ計画することになった。隊長は松方三郎氏にお願いし、登攀隊員二十名、その他科学班など含め日本人隊員は三十七名で編成する予定。ルートは南壁からのエベレスト登頂を第一の目的とし、サウス・コル経由の隊がこれをサポートする。また余力があればローツェにも登る。予算は七千万円。必要外貨は六万四千ドル。スキー隊との関係については現時点においては考慮していない。

②会員総会の件　(飯野)

財産目録、収支決算事業報告など承認

③一九六九年度UIAA総会の件　(大塚)

本年十月二日か六日までチェコのプラハで開かれる。条件は前年と同じで海外連絡委員の田村俊介氏に出席してもらう予定にしている。

④シャモニ国立登山学校招待の件　(丹部)

目下候補者を選考中である。

⑤谷川岳登山条例に関する身分証明書発行の件　(広谷)

学生の新人合宿の場合新人にも臨時に証明書を発行するが、合宿終了後は常該校のリーダーに保管してもらう。

⑥磯野氏追悼会の件　(野上)

⑦尾久杉保護の件　(川森)

⑧古家実三氏短冊寄贈の件　(山崎)

昭和四十三年度通常会員総会議事録

昭和四十三年度通常会員総会は昭和四十四年四月十九日午後三時から本会集会室で行なわれた。

▽開会の辞(藤井常務理事)

▽会長挨拶(三田会長)

四十三年度の大きな事業は日印合同婦人登山隊の成功で、ただ山登りだけでなくインドの婦人とけあい立派な成果をあげてきた。UIAA(国際山岳連盟)総会が十月ロンドンで開かれ吉沢副会長に出席してもらった。

本会のエベレスト登山もネパール政府から正式に許可がおりていよいよ本格的準備にとりかかることになった。南壁の難しいルートから登ることにしたが、エベレストの登山についてはその都度会報で御報告する。日本山岳会はクラブだが、メンバー同志仲よく山登りを通じ楽しいきずなをきずきあげたい。若い人も年とった人も深い友情を持ち続けたい。

また物価の値上げにともない会費の値上げをしなければならなくなった。後で議案として提出するが、御賛同を得たい。

①議事

昭和四十三年度事業報告　(大塚常務理事)

報告書のとおり承認。

▽各支部報告

・東九州支部(野口支部長)

台湾、朝鮮の山に出かけた。

・東海支部(伊藤支部長)

マカルー遠征の準備を進めている。また新しいルームを設けた。

・静岡(山本支部長)

二土会を作り、毎月会合している。会員からエベレストの募金をすると

きは額に応じエベレストの写真をわけてもらいたい。
・越後支部（藤島支部長）
越後山岳六号を出した。支部総会は五月にやる。
・宮城支部（伊達支部長）
岳連とともに二十回くらいの山行をやった。台湾の友好登山隊を蔵王に案内した。東北大OB関係でアラスカ遠征の計画がある。
・秋田支部（荒巻支部長）
日韓親善登山をやり、台湾玉山縦走の後援をした。本年六月で十周年を迎える。
・石川支部（小林支部長）
金沢大の今冬の剣岳遭難についておわびする。安田火災山岳遭難保険第一号となった。
その他、福島、関西支部から報告書が送られてきた。
▽昭和四十三年度決算報告（別項）
▽昭和四十三年度財産目録報告（別項）
（以上飯野常務理事）
▽監事による監査報告（別項）
（牧野監事）
以上三件承認。
②議案
▽昭和四十四年度役員選任の件
四十四年度役員として次の各氏を選任した。
〔理事〕三田幸夫、吉沢一郎、深田久弥、山崎安治、大塚博美、飯野亨、小倉董子、広谷広一郎、長尾悌夫、中島寛、浜野吉生、野上成勇、（以上再任）加藤泰安、辰沼広吉、村木潤次郎、川上隆、松田雄一、藤田佳宏、原真、牧野内昭武（以上新任）
〔監事〕小原勝郎（新任）
〔評議員〕中野征紀、今西寿雄、折井健一、織内信彦、村山雅美、藤井運平、金坂一郎（以上新任）
▽昭和四十四年度事業計画案討議の件
別項議案三を承認。
大塚理事より、エベレスト登山について特に説明があった。一九七〇年春を目標に外務省に正式に手続きし、エベレスト委員会は新しく設けられてすでに活動を開始、有能なメンバーを編成したい。この五月藤田理事、槙村、菅沢両会員を偵察隊として出すことにし、四月二十三日羽田を出発、クウム氷河に五月十日から約一ヵ月偵察するむね発表があった。
▽定款一部（第六条一、二）改訂の件（年会費および終身会費改訂）（飯野理事）
別項議案四のとおり承認
▽昭和四十四年度収支予算案討議の件（飯野理事）
別項のとおり承認。
（出席者）三田幸夫、島田巽、林和夫、松田雄一、飯野亨、須田紀子、今井雄二、望月達夫、吉沢一郎、山本朋三郎、中西豊和、藤井運平、永原輝雄、宮下秀樹、中島寛、川崎巌、松本熊次郎、加藤泰安、中野征紀、小林雄次郎、川崎精雄、浜野吉生、平沢亀一郎、高橋進、辰巳賢一、日本獣医畜産大学山口栄二、同山下裕民、城谷一誠、野口秋人、森川洋佑、山本俊冬、山崎安治、藤島敏男、中尾正武、交野武一、錦織英夫、水越武、織内信彦、石原憲治、山口健児、荒巻広政、鈴木郭之、伊達篤郎、伊藤洋平、原真、W・H・ARNOLD、上田富雄、諸岡一次、田上敏行、堀川英司郎、鵜岡良司、関口周也、深田久弥、広羽清、岸栄、田辺多聞、槇有恒、藤田佳宏、吉武正子、植村直己、菅沢豊蔵、金坂一郎、大賀二郎、川上隆、野口末延、瀬名貞利、国見利夫、折井健一、今井喜美子、岡部浩子、斎藤桂、小倉董子、小倉茂輝、牧野内昭武、山口節子、稲田房子、松永敏郎、松方三郎、日高信六郎、牧野衛、小島甫、尹宗炳、山崎金次郎、中田勇吉、藤島玄、関田美智子、足立源一郎、川森左智子、片桐理一郎、貝森健治、野上成勇、伊倉剛三、安彦六郎、林紗千子、相沢裕文、名児耶達男、島田公博、坂本肇、水野公男、小野利次、沼倉寛二郎、村木潤次郎、長尾悌夫、福井正吉、菊池修身、武田満子、初見一雄、辰沼広吉、大塚博美、成瀬岩雄

議案三

昭和四十四年度事業計画案

①登山の指導奨励に必要な集会、研究、講習会、および展覧会などの開催
イ、集会
・小集会場所（本会）年十回
・第二十三回ウェストン祭場所（上高地）六月七、八日
・有志閑談会場所（六義園）六月十四日
・支部長会議場所（本会）四月、十二月
・在日外国人登山家との交観　十月
・年次晩餐会　十二月五日
ロ、研究会
・雪崩研究会　十一月中旬
ハ、講習会
・登山技術研修会　六月または十一月
・スキー技術講習会　一月中旬
ニ、展覧会
・年次晩餐会に際し「この一本展」に準ずる展示を行なう　十二月五日
②登山施設の改善の促進、その他登山のための適切な事業
・上高地に「神河内山荘」を開設六月―十月下旬
③山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導
・富士山頂に夏山診療所開設七月～八月
・各大学医学部山岳部による夏山診療所に対する援所　七月～八月
④自然保護活動の推進
・自然保護委員会で国立公園内の自然保護運動に協力
⑤海外登山の企画および指導
・ネパール・ヒマラヤ登山禁止解除に伴ない、昭和四十五年プレモンスーンを目標にエベレスト登山実施の準備
・本会東海支部によるマカルー登山隊後援
・本会山陰支部によるパキスタン、ヒンズークシュ登山隊の後援
⑥機関誌「山岳」、「会報」、および「山日記」その他の図書の刊行
・「山岳」第六十四年の発行
・「会報」年十二回発行
・「山日記」昭和四十五年度発行
・山岳古書復刻、山岳図書交換会
⑦目的を同じくする国内および国外団体との連絡情報の交換
⑧その他目的を達成するため必要な事業を行なう。

議案四

定款一部（第六条一、二）改訂の件

改訂案
第六条　本会の会員は次のとおりとする。
1　通常会員　本会の目的に賛同し本会の定める入会金五千円および下記の年会費を納める個人または団体。
東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県に在住するもの三千円
上記以外の国内に在住するもの二千五百円
国外に在住するもの七米ドル
2　終身会員　本会に入会後五ケ年間以上在籍せる個人会員にして、所定の終身会費を納めたもの。ただし終身会費は次の通りとする。
入会後五年以上在籍せるもの　八万円
十年以上在籍せるもの　七万円
二十年以上在籍せるもの　五万円
三十年以上在籍せるもの　四万円
四十年以上在籍せるもの　三万円

四月臨時理事評議員会

（二十四日午後七時本会ルーム）
▽出席者　三田会長、深田、吉沢副会長、加藤、辰沼、広谷、飯野、大塚、浜野、山崎、川上、野上、長尾、小倉、広谷、牧野内、松田各理事、折井、今西、金坂、藤井、村山、島田、中田、織内各評議員
▽議事および報告
・常務理事を加藤泰安、辰沼広吉、山崎安治、大塚博美、広谷光一郎、飯野亨、松田雄一、浜野吉生、中島寛の九名と決定
・常任評議員は別室で評議員会を開き藤井運平、沼倉寛二郎、織内信彦、村山雅美、金坂一郎、渡辺公平の六名に決定
・事務分担を次のとおり決定
総務、自然保護、支部（加藤）遭難対策（辰沼）会報（山崎）エベレスト（大塚）、海外（松田）経理、山荘、庶務（飯野）山岳（中島）指導研究（広谷）集会（川上）学生部（浜野）山日記（牧野内）婦人部（小倉）医療研究（長尾）図書、ルーム（野上）
・会の運営方針について　（三田）
会員サービスを第一とし、会員間の密度を高めるのが第一である。そのためのエベレスト登山である。次に神河内山荘の再建をはかりたい。
・エベレスト登山の件　（大塚）
四月二十三日のJALで藤田理事を隊長に槙村直己、菅沢豊蔵会員の三人が偵察に出発した。準備委員会を早急に結成したい。
・フランス山岳連盟がシャモニで開催する七月の国際アルピニスト集会に松島利夫、望月晃両会員を推薦する
・本年度のUIAA総会は十月チェコ

のブラハで開かれるが会員田村俊介氏に出席してもらう。

・婦人部の登山講習会を九月二十三日前後立山の登山研修所で開催する予定なので協力をお願いする（加藤）

・なお三田会長から、バンダリ・ネパール大使が近く交代して帰国するため、その前に日本を見物したいという希望があり、会員の協力を依頼するとの発言があった。

昭和四十四年度支部長会議

▽日時　昭和四十四年四月二十日午前十一時～二時

▽場所　本会集会室

▽出席者　中田富山支部長、山本静岡支部長、藤島越後支部長、野口北九州支部長、伊達宮城支部長、小林石川支部長、荒巻秋田支部長

吉沢、深田副会長、飯野、加藤、辰沼、松田、中島、山崎各理事

エベレスト登山の件、指定山小屋の件などについて説明があり、指定山小屋の件はいちおう中止とした。そのほか各支部の現状などについて懇談した。

なお支部長会議は年二回とし、会員総会、および年次晩餐会の当日の昼に開くことにした。

図書室便り

新刊図書受入報告（昭・44・3）

松本営林署寄贈

(1)『高山（寒地）植物分布目録』昭43・8

日本山岳会東海支部寄贈

(1)『海外登山研究会資料Ⅰ』昭44・2

川崎精雄氏寄贈

(1)川崎精雄著『雪山・薮山』昭44・2

茗溪堂刊

横山篤美氏寄贈

(1)横山篤美著『上高地開発史　その4道の変遷』昭44・3

宮森常雄氏寄贈

(1)東京農業大学農友会探険部『ヒンズ・クシュ学術調査報告書』昭44・1

村井葵氏寄贈

(1)村井葵著『幻想のヒマラヤーローツェ・シャール登山の記録』昭44・4　冬樹社刊

北海道大学体育会山スキー部寄贈

(1)『北大山スキー部　部報　創刊号'67』

定期刊行物受入報告（昭44・4）

【部報・会報類】

1『あしなか』No. 114　44-3

2『兵庫山岳』No. 23　44-4

3『国立公園』No. 233　'69-4

4『京都山岳』No. 527　'69-4

5『日本山岳協会会報』No. 12

6『OMCレポート』No. 233　'69-4

7『山嶺』No. 468, 469　44-4, 5

8『自然保護』No. 83　'69-4

9『低山』Vol. 8, no. 4　'69-4

10『山と雪』No. 132　44-4

11『山』No. 442　'69-4

【山岳雑誌】

1『アルプ』No. 134　'69-4

2『岳人』No. 262　'69-5

3『HIKER』No. 163　'69-5

4『岩と雪』No. 14

5『山と渓谷』No. 368　'69-5

地図受入報告（昭44・4）

慶応大学山岳部寄贈

(1)『Himal Chuli』1:50,000

バック・ナンバー受入報告（昭44・4）

山と渓谷社寄贈

(1)『岩と雪』No. 12, 13

中島寛氏寄贈

(1)『山岳同志会論叢』No. 2　'66-7

洋書受入報告（昭44・4）

Mr. Borushko M. S. 寄贈

1.『ПОБЕЖ ЦЕННЫЕ ВЕРШИНЫ 1961-1964』

Journal Arrived in Apr. 1969

1. Die Alpen, 45. Jahrg. 1. Quartal
2. Die Alpen, 45. Jahrg. 2, 3. Feb.-Marz 1969
3. The Alpine Journal, v. 73, No. 317. Nov. 1968
4. Alpinismus, 7. Jahrg. 3. Marz 1969
5. Der Bergsteiger, 36. Jahrg. 3.Marz 1969
6. The Geographical, v. 134, part 4. Dec. 1968
7. Osterreichischen Alpenvereins, 23. Jahrg. Heft 11/12. Nov./Dez. 1968

エベレスト委員会日誌

◇四十四年三月六日定例理事評議員会で、新エベレスト委員会設置を決定。（委員長は三田会長兼任、委員、加藤泰安、小原勝郎、辰沼広吉、大塚博美、松田雄一、中糸寛で当初はスタートする。）

◇三月十八日第一回エベレスト委員会（本会ルーム）出席者　三田、加藤、小原、辰沼、大塚、松田、中島、槇名誉会員（欠席松方）

▽議題　七〇年ブレ実施に関する基本問題

・正式アプリケーションの提出

・スキー隊との件は許可があってから理事会決定どおり、七〇年ブレに実施することを確認。

◇三月二十五日臨時理事評議員会でエベレスト委員会委員七名承認される

◇四月八日第二回エベレスト委員会（本会ルーム）出席者　三田、加藤、大塚、松田、中島、槇、松方委任小原、辰沼、中島

▽議題　エベレスト本隊計画原案を検討、南壁をとりあげることを承認。

◇四月九日　午前毎日事業所、運動部と計画について相談、（北川部長、東保、渡辺、石川、大塚）

午後　NHK教育局産業科学部香川氏にエベレスト計画について挨拶。今月中に返事をお願いする。ネパール外務省から許可する書状が届く。四月四日付

◇四月十日　定例理事評議員会でエベレストの計画内容（南壁ルート）を報告承認さる。七〇年ブレ本隊、松方三郎隊長ほか二十一名、本隊予算七〇〇〇万円春、秋の偵察隊。

◇四月十一日　記者発表（十六時から本会会議室）十社二十名、三田、松方、大塚、松田、中島（翌朝の各紙に報道される）

◇四月十四日　アプリケーションを外務省に提出。

◇四月十六日　第三回エベレスト委員会、（本会ルーム）出席者　三田、加藤、小原、辰沼、大塚、松田、中島各委員、槇、松方。

▽議題①第一次偵察派遣の件、リーダー藤田佳宏、植村直己、菅沢豊蔵の三名、至急派遣を決定。なお毎日も相沢特派員（会員）を同行、承認された。

②準備委員会編成の件

③酸素の研究と発注の件

午後四時三十分毎日新聞で幹部（斎藤主幹、苅編集局長、北川事業部長、運動部長他）ならびに本会から槇、松方名誉会員、三田会長、大塚理事にて本計画事業後援について打合わせ、毎日側から、新聞では一社にて後援したい旨の意向が述べられた。

◇四月十九日　第一次偵察隊記者発表、十四時、体協記者クラブ、藤田隊長、大塚。

本会総会（十五時～十七時）にてエベレスト計画発表、承認を受ける。

・アプリケーション外務省に提出

・東海支部マガルー計画についての協力依頼

四月二十一日　在日ネパール大使館訪問、バンダリー大使に挨拶。第一次偵察隊員四名、三田会長、大塚。以降外務省兼松情文部長（三田、大塚、藤田）、文部省スポーツ課長（三田、大塚）を訪問、計画説明。

四月二十三日　第一次偵察隊藤田隊長他三名、十三時二十分で羽田を発つ。一・三トンの荷物は二十一日に発送。

◇四月二十四日　NHK編成森本主管と会い重ねて従前からの挨拶を行なう。（加藤、大塚）

◇五月六日　第四回エベレスト委員会（本会ルーム）出席者　三田、加藤、辰沼、大塚、松田、中島、槇、住吉

資金計画検討

①文部省国庫補助申請は六月からはじめねばならず、全般の準備からみて五月中に資金のメドを立てたい。文部省への補助申請金額は一千万円と決定。NHKの返事が遅い場合の対策として民放（NET）を考えることにする。

②五月三日に予定していたスキー隊との話し合いは流会となる　（加藤）

③酸素の件、フランスの酸素ボンベ百五十本（二百三十気圧、四リットル五万円）とりあえず三井物産へ購入依頼、国産（川崎重工、百五十気圧、四リットル、二万円）の分として最低三百～三百五十本くらい製作を問いあわせる　（住吉）

④エベレスト委員会に槇、松方両氏を委員に追加することを承認。

ルーム日誌（44年4月）

3日（木）自然保護委員会

4日（金）北大山の会

7日（月）明治大学山岳部炉辺会

8日（火）エベレスト委員会

学生部総会

9日（水）海外連絡委員会
10日（木）定例理事評議員会
11日（金）エベレスト記者会見
12日（土）永原輝雄氏慰労会
16日（水）エベレスト委員会
19日（土）一九六九年度通常会員総会
20日（日）支部長会議
24日（木）臨時理事評議員会
会報編集委員会
婦人懇談会委員会

四月中来室者　四五一名　外に通常会員総会出席者一一一名

ルーム基金入金報告

二月一日～三月三十一日間のルーム基金応募者は左記の通りです。

申込件数　二八件（追加二六件を含む）
申込口数　三〇・五七口
総申込件数　一三八二件
総申込口数　八〇〇五口

氏名	会員番号	応募口数	現在地
飯野亨	四四六七	追	東京
石原憲治	一八六五	計追	東京
小倉董子	三九〇八	計追	東京
小方全弘	四六五四	計追	東京
大塚博美	三五一四	計追	神奈川
小野敏之	六一一七	計追	東京
島田巽	一二二七	計追	東京
柴田厳太郎	六四九四	計追	東京
高山忠四朗	二七〇二	計追	長野
丹部節雄	五八九七	計追	東京
竹田寛次	四五九六	計追	東京
津田周二	一〇四九	計追	兵庫
中島寛	五五七〇	計追	埼玉
長尾悌夫	五一四四	計追	神奈川
沼倉寛二郎	二一八五	計追	東京
野上成勇	五八五六	計追	岐阜
早田道治	五六二六	計追	東京
広谷光一郎	五〇三七	追	東京
平位剛	六〇七八	計追	広島
深田久弥	一五八六	計追	東京
藤井運平	二五四一	計追	東京
堀田弥一	一二三一	計追	東京
三田幸夫	九二四	追	東京
宮下秀樹	五五五〇	計追	東京
望月達夫	一七三九	計追	東京
山崎安治	一八三五	計追	東京
吉沢一郎	九三〇	計追	東京
芳野赳夫	四四二八	計追	東京

既申込者の中よりの入金報告

事務局

山二六九号（42年11月）に九月末現在の募金応募者の名簿を発表した際、未入金者に※印を付しました。その後二七一号・二七三号・二七五号に入金者名を発表したのに次いで43年4月～44年4月までに左記八名の方より入金がありましたのでご報告いたします。

氏名	会員番号	入金口数	現住地
石田寿郎	四九八五	一	大阪
隈部恵子	四七六五	三	東京
慶応義塾大学体育会山岳部	一六三八	五〇	東京
鈴木郭之	四六七七	五	東京
だけかんば山の会	五八四二	一	長野
広羽清	三二五七	五	東京
細川雅弘	五六〇二	三	東京
室井克之	五八二〇	一	岡山

退職ごあいさつ

一年八ヵ月の私の小屋番生活は、長いようで短かかった。その間私は、毎日忙しく仕事に追いまくられた。

山岳会というところは、何と人使いの荒いところだと思ったこともある。それは移ったばかりの新らしいルームの整備もあったが、それよりも前任者の引継ぎがなく、会の機構が呑み込めないうちに事務処理が殺倒してきて、受け立ちが出来ず、一時は御免を蒙ろ

うかとさえ思ったが、そうなったら会の事務が渋滞して迷惑をかけるので、気を取直して頑張った。そのうちに慣れるに従い、多少の余裕が出来て、事務の整備に取かかり、会の唯一の財源である、会費の徴収強化に努めて、いささか成果をあげ得たつもりである。

一年経つと年間の行事其他を一通り経験して、それからいよいよ本腰にやれると意欲を燃した。また一方にはルームの環境をよくして、会員に満足して貰える様にも努めて来た。自分も会員の一人であるから。その間私は自分が会員でありながら、事務局員であることを、常に意識して、二足のわらじを混同しないようにやってきたつもりであったが、はたから見たら、やはりわらじを履き違えた時があったかも知れないことを恥ぢている。ともあれ私の第二の人生であった山岳会の小屋番生活は、「楽しかった」の一言につきることを、この機会に申上げ感謝したい。

大きな山ふところに抱かれて、その中で歩きまわり、時に憩い、時に眺め、そして山の友と語る機会に恵まれたことは、他の所では得られない、ありがたい世界であった。

このたび老令その任にあらず、ということで退職することについては、何も申上げる事はありません。ただ在任中のわがままをお許し下さって、御指導と交誼を賜りました、役員はじめ会員各位に対し、厚く御礼申上げます。終身会員の私は、今後も末永く会とおつき合い願うために、残った一足のわらじの紐を締め直して、第三の人生の山に登る覚悟でおりますから、何卒今後共宜しく御願い申上げて、退職の御挨拶と致します。

よくばった二足のわらじ一っきれ

小屋番やめてもとの会員

（永原輝雄）

あとがき 昭和四十四年度の「山」編集委員は次の三名です。この号から仕事にとりかかりました。できるだけ会の動きにマッチしたものを、と考えております。よろしく。（山崎）

昭和四十四年度会報編集委員

吉沢一郎

松田雄一

（担当理事）山崎安治

昭和四十四年六月十日発行

東京都千代田区神田錦町三―二三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎安治

（293）七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 （201号～250号）金600円也

送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2～15, 電話（943）0311（代表）

大阪店・都島区相生町7, 電話（352）3491（代表）

名古屋店・昭和区雪見町1～15, 電話（731）7331（代表）

工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）

▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

昭和43年度収支決算表

自 昭和43年4月1日
至 昭和44年3月31日

歳入 科目	予算	決算	予算に対する決算増減(△)
経常収入	4,350,000	5,153,700	803,700
入会金	750,000	1,280,000	530,000
会費	3,600,000	3,643,700	43,700
終身会費		230,000	230,000
事業収入	2,170,000	2,770,741	600,741
広告料	620,000	679,800	59,800
(内山岳)		(508,000)	
山日記	500,000	500,000	0
刊行物売上	800,000	1,431,620	631,620
(内山岳)		(1,389,640)	
山荘使用料	250,000	159,321	△ 90,679
雑収入	360,000	329,374	△ 30,626
利息	100,000	107,460	7,460
雑収入	200,000	191,914	△ 8,086
貸室料	60,000	30,000	△ 30,000
クラブタイ勘定		291,403	291,403
ルーム関係寄付金勘定		814,803	814,803
小計		9,360,021	2,480,021
繰越	4,086,694	4,086,694	0
合計	10,966,694	13,446,715	2,480,021

歳出 科目	予算	決算	予算に対する決算増減(△)
運営管理費	4,425,000	4,297,954	△ 127,046
手当	1,150,000	1,142,700	△ 7,300
文具費	180,000	120,854	△ 59,146
印刷費	210,000	95,005	△ 114,995
交通費	250,000	159,210	△ 90,790
通信費	700,000	1,061,514	361,514
家賃	1,073,000	1,073,160	160
保険料	20,000	20,458	458
営繕費	30,000	62,690	32,690
諸税公費	12,000	51,030	39,030
光熱費	170,000	72,246	△ 97,754
電話料	90,000	79,832	△ 10,168
会議費	50,000	37,531	△ 12,469
交際費	80,000	37,864	△ 42,136
備品費	50,000	105,940	55,940
雑費	200,000	79,520	△ 120,480
振替手数料	60,000	38,700	△ 21,300
支部運営費	100,000	59,700	△ 40,300
事業費	3,150,000	5,789,321	2,639,321
会報出版費	800,000	1,026,232	226,232
山岳出版費	1,500,000	2,839,840	1,339,840
図書費	100,000	140,395	40,395
調査研究費	100,000	0	△ 100,000
指導費	100,000	79,330	△ 20,670
名簿発行	300,000	309,000	9,000
山荘運営費	250,000	200,335	△ 49,665
海外諸関係費		1,194,189	1,194,189
クラブタイ勘定		365	365
ルーム移転関係費		750	750
小計	7,575,000	10,088,390	2,513,390
予備費	50,000		△ 50,000
次年度繰越	3,341,694	3,358,325	16,631
合計	10,966,694	13,446,715	2,480,021

4) 図書

種類	冊(枚)数	金額
洋書	787	1,574,000
和書	1,931	1,544,800
地図	268	69,440
計	2,936	3,138,240

5) 絵画

20点 他 500,000

〔参考〕

未収金 広告料 36,000

社団法人日本山岳会昭和43年度収支決算表及び財産目録につき，監査致しましたところ其の正確なことを認承致します。

昭和44年3月31日

監事 牧野 衛
同上 堀田弥一

3) 什器・備品

種類	数量	金額
宛名カードケース	1	12,311
新刊書ケース	1	4,309
セーフネス金庫	1	14,996
宛名印刷機	1	11,485
英文タイプライター	1	6,310
電話	1	27,000
スライドプロジェクター	2	22,574
テープレコーダー	1	9,465
スチール雑誌架	4	28,168
椅子	46	107,508
机・テーブル	15	156,453
スチール黒板	1	13,772
両開き書庫	7	51,114
ファイリングキャビネット	4	33,940
マツプロッカー	1	48,791
コンパック移動書庫	4	149,516
キーパー引違書庫	1	8,264
移動式踏台	1	4,290
スチール書架	2	6,217
組立用本棚	1	3,463
スクリーン	1	19,123
電気掃除機	1	7,808
ホールスタンド	3	26,100
計		772,977

財産目録

(昭和44年3月31日現在)(単位円)

資産総額 14,519,542
1. 基本財産 100,000
1. 運用財産 14,419,542

内訳 1. 基本財産

種類	預入先	金額
貸付信託	日本信託銀行本店	1,000,000

1. 運用財産

1) 現金及預貯金

種類	預入先	金額
現金		91,071
普通預金	東京銀行本店	10,649
	協和銀行神田支店	236,717
	八十二銀行松本支店	204,933
定期預金	協和銀行神田支店	2,300,000
通知預金	協和銀行神田支店	500,000
振替貯金	東京振替貯金課	14,955
保証金	向井組	6,000,000
計		9,358,325

〔参考〕 終身会費330,000を含む。
(定期預金300,000,現金30,000)

2) 建物

用途	位置	構造	坪数	取得年月日	記帳価格
山岳研究所	長野県南安曇郡安曇村上高地国有林13林小班	木造トタン葺平家建	22坪	昭和36年5月25日	600,000

昭和44年度収支予算表

(△印前年度比減)

歳入 科目	予算	前年度予算	増減
経常収入	6,150,000	4,350,000	1,800,000
入会費	900,000	750,000	150,000
会費	5,150,000	3,600,000	1,550,000
終身会費	100,000		100,000
事業収入	3,040,000	2,170,000	870,000
山岳広告料	600,000	620,000	230,000
会報広告料	250,000		
山日記印税	500,000	500,000	0
刊行物売上	1,600,000	800,000	800,000
山荘使用料	90,000	250,000	△ 160,000
雑収入	280,000	360,000	△ 80,000
利息	80,000	100,000	△ 20,000
雑収入	200,000	200,000	△ 60,000
貸室料		60,000	
小計	9,470,000	6,880,000	2,590,000
前年度繰越	3,358,325	4,086,694	△ 728,369
合計	12,828,325	10,966,694	1,861,631

歳出 科目	予算	前年度予算	増減
運営管理費	4,684,000	4,425,000	259,000
手当	1,150,000	1,150,000	0
文具費	120,000	180,000	△ 60,000
印刷費	150,000	210,000	△ 60,000
交通費	290,000	250,000	40,000
通信費	950,000	700,000	250,000
家賃	1,213,000	1,073,000	140,000
保険料	21,000	20,000	1,000
営繕費	70,000	30,000	40,000
諸税公費	20,000	12,000	8,000
光熱費	80,000	170,000	△ 90,000
電話料	80,000	90,000	△ 10,000
会議費	50,000	50,000	0
交際費	50,000	80,000	△ 30,000
備品費	200,000	50,000	150,000
雑費	90,000	200,000	△ 110,000
振替料	50,000	60,000	△ 10,000
支部運営費	100,000	100,000	
事業費	4,220,000	3,150,000	1,070,000
会報出版費	950,000	800,000	150,000
山岳出版費	2,760,000	1,500,000	1,260,000
図書費	150,000	100,000	50,000
調査研究費	80,000	100,000	△ 20,000
指導費	130,000	100,000	30,000
名簿発行		300,000	△ 300,000
山荘運営費	150,000	250,000	△ 100,000
小計	8,904,000	7,575,000	1,329,000
予備費	200,000	50,000	150,000
繰越	3,724,325	3,341,694	382,631
合計	12,828,325	10,966,694	1,861,631